

〔翻訳〕

シェリングと自然科学と医学¹⁾

ゲオルク・ビーダーマン

尼寺 義弘 (訳)

以下に翻訳する論文の原著者、原著名、所収された原著書とその出版社、出版年などをはじめに掲げておこう。

Georg Biedermann: Schelling, die Naturwissenschaften und Medizin.

In: Medizinprofessoren und ärztliche Ausbildung, Beiträge zur Geschichte der Medizin hrsg. Dr. G. Wagner · Prof. G. Wessel Universitätsverlag Jena GmbH 1992.

原文の翻訳に先だつてこの論文の収録されている上記の原著書『医学教授と医学教育』の序文を訳しておくことは今日のドイツの学問状況の一端をしるうえで参考となると思われるのではじめに訳しておこう。序文はF. シラー大学(イエーナ)の医学部長 Wolfgang Klinger 教授によって1992年3月に書かれている。なおこの著書は総計30名の著者による21編の論文と1編の資料からなる。著書の全体は350頁(A5版)である。

序 文

転換の、大革命の、新たな始まりの、古い構造と機能の分離の、内容に満ちた新たな概念の、そうした時代において、従来承認されていたことへの新しい意義づけと評価とが、したがってまた従来誤って解釈されてきたことやとりわけ抑圧されていたことへの新しい意義づけと評価とが、そして医学の確実な発展方向の系統的な継続ということが、絶対に不可欠なことである。

わがF. シラー大学の発展はつねに傑出した大学教員によって担われ特徴づけられてきた。

医学部はわが大学の4つの基礎的な学部の一つであり、初代の学長は医学者であった。医学者たちはたえず拡大する学科の数とそれにとまなう専門領域の発展に力を注ぐだけではなく、つねに他の学部(自然科学のみならず)の代表者たちと活発に相互に交流しあう関係をむすび、積極的に総合大学の形成に加わっていった。

イエーナというこの地は、19世紀末以来、「啓蒙的な」、自然科学的にますます厳密に方向づけられた医学によって、世間に知られるほどの大きな意義をもっていた。だから『イエーナの医学教員』(第2版, 1988年)という前の著作が公刊されたことに対して読者の関心がきわめて高かったこともまた当然のことであった。

この書は1989年より準備され構想された。初めに述べた建設的で生産的な伝統保持という関心事は、他の条件〔ドイツ民主共和国の時代一訳者〕のもとでと同様に今日においても、われわれにとって重要なことである。この伝統保持という基本理念は、変化する時代の流れのなかにおいてもその働きを一層きわだたせ、従来と同じように妥当性もち生産的なものである。将来の発展のための礎石をおいた、歴史的な人物の永続的な功績を明らかにする、という基本理念の一つの目標を見失わなかった本書の編者は感謝されてしかるべきである。そしてこの著作が完成されたのはすぐれた著者たちに負うところ大である。

最後に大学出版局(イエーナ)につぎのこと

で感謝しなければならない。大学出版局は経済的な転換とそれと結びついた不確実さと困難のなか、この書を最初の公刊物の一冊として生み出してくれた。本書の出版は1989年の政治的な変革ののちにまさに初めて実を結んだ良き伝統の継続であるといえる。

Jena, im Mai 1992

Prof. Dr. Wolfgang Klinger

Dekan der Medizinischen Fakultät

Friedrich-Schiller-Universität Jena

シェリングに対して医学名誉博士の学位が授与されることに関するランツフート大学医学部(バイエルン)の広告は、シェリングの両親への彼のつぎの手紙のなかで知ることができる。「ランツフート 1802年6月5日 ルートヴィヒ・マクシミリアン大学医学部がイエーナ大学の哲学博士で同教授であるF. W. J. シェリング氏に、彼がすでに行ってきたし、そしてさらに行うことになるであろう医学の科学的基礎づけという功績に鑑みて医学博士を授与するということほど昨日来祝っている大学の記念祭にとって時機にかなったことはないとの確信のもと、名声あるこの集会においてシェリング氏に本日医学部長アーロイス・ヴィンター博士によって多くの人々の見守るなかきわめて光栄に満ちて医学博士が授与された。」(F. W. J. Schelling. *Briefe und Dokumente*, Bd. II, Zusatzband. Hrsg. H. Fuhrmans. Bonn 1973, S. 469.) [……による強調の原文はイタリックである。以下同様——訳者]

シェリングは1793年から1801年にかけて公刊した哲学上の著作によってカントとフィヒテの主観的観念論を客観的観念論へ発展させたドイツ古典哲学の代表者の一人として登場する。彼の特別の功績は自然哲学と自己意識すなわち自我の哲学の領域にある。

その領域では自然科学の業績の理論上の普遍化との関連において、自然弁証法の基本的な方

向づけと近代の歴史概念の根本的な構図とが現れている。自然と人間についての彼の原理的な研究は自然科学とりわけ医学に関する独自の研究によって特徴づけられている。彼はその研究を教育学上の考え方を顧慮しながら『学問研究の方法に関する講義』(1802/1803)において体系的に展開している。

シェリングのドイツ古典哲学に対する学問的な寄与に関して手短かにふれたのでつぎに彼の生涯について簡単に記しておこう。

1. 生涯と著作

フリードリヒ・ヴィルヘルム・ヨーゼフ・シェリングは1775年1月27日にシュトゥットガルト近郊のレーオンベルグでキリスト教の助祭であったヨーゼフ・フリードリヒ・シェリングの第2子として生まれた。彼はラテン語学校と上級神学校を卒業したのち、司祭の職につくための準備として1790年から1795年までチュービンゲン大学神学部で勉学に励んだ。とはいえフランス革命に影響されて、彼はやがて大学の保守的な精神や修道院のような神学部の秩序と矛盾に陥ることになる。彼はかくして神学からルソーやカントの社会批判的な考え方、とくにフィヒテの哲学へ志向することになる。シェリングは今やフィヒテの絶対的な信奉者である。チュービンゲンで彼はまたヘーゲルやヘルダーリンと知り合いとなり、彼らとのあいだで長きにわたる友情を結ぶのである。おそらく彼は、1793年にチュービンゲンにやってきて、『あらゆる啓示の批判』の著者として深い印象を彼に残したフィヒテとも個人的に知り合うことになったといえるであろう。

17才の若さでこの天分のあるシェリングはすでに哲学博士の学位を授与されることになる。すなわち彼は1793年の冬に最初の作品、『古代における神話、伝承および哲学的原理について』を執筆する。その作品には肯定的な諸契機(たとえば自然への志向)とならんで彼の完成された哲学にはらまれている一定の否定的な傾向(芸術と神話学がもっている精神的な働きの強

調のしすぎ)も表現されている。そののち彼はなお学生の身分で『哲学一般の形式の可能性について』(1794)と『哲学の原理としての自我について』(1795)という著作を出版する。彼は初期のこれらの著作において非自我を自我に事実上等置ることによってフィヒテの『学問論』を事実上凌駕していることを証明している。

学業を終えたシェリングは、カントやフィヒテやヘーゲルと同様に、家庭教師として暫定的に活動を開始する。ライプティヒへ赴いたのは1795年の春であった。ライプティヒで彼は数学や自然諸科学とりわけ物理学や化学や医学に積極的に取り組む。これらの研究の成果は一連の内容を具えた著作にみることができる。彼は、もとよりスピノザやライプニッツの哲学に影響されて、主観的なフィヒテの自我を非自我をもふくめてもども客観的なものとし、それを自然にまで押し広げる。かくして事柄の本質からしてこれらの著述においてすでに主観的な観念論から客観的な観念論への移行を実現している。この生成において把握された新しい哲学のもっとも重要な記録の一つは『世界の創造主について』(1798年復活祭)という著作である。この作品はゲーテの熱烈な歓迎をえることになり、そのことがシェリングをイエーナ大学哲学教授の道へと進めるのである。教授の任用は1798年6月30日であった。

イエーナ時代にシェリングは常に多くの学者や政府の官僚たちと知り合いとなる。それはゲーテやシラーであり、そしてロマン派の芸術家たち、そのなかには彼ののちの妻となるカロリーネ・シュレーゲルやそしてまたシュレーゲル兄弟や医者レッシュラウプやその他大勢の人々である。シェリングにとってイエーナ時代は哲学のうでで成熟の時代であり、名声をえた時代である。イエーナの悪名高い例の無神論論争で彼はフィヒテに加担する。彼はその論争をとおして哲学的思考のもっとも重要な領域でドイツ古典哲学の形成のために決定的な役割を果たしている。まず第一に、自然哲学の領域では事物の現実の対立の、すなわち「普遍的な世界法

則」としての、極性の発見あるいはその精緻化によってである。第二に、先験的哲学の領域では自己意識の歴史の基礎づけすなわち主体・客体の弁証法あるいは自由と必然性の弁証法を土台とするところの自我の進展する規定として世界史——それは芸術あるいは神話学の哲学において完成する——を基礎づけることによってである。芸術の技術的・実践的な側面の強調によってシェリングは事実上実践の契機を哲学に導入する。

シェリングの認識論の第三の業績は、客観的観念論の世界観のもとでその前提となる(主体と客体との)絶対的な同一性の規定にある。さらに詳しくそれを規定すると、絶対的同一性あるいは絶対者そのものはこの哲学者によって先行の著作で展開されたところの、精神(神)と自然あるいは理念的なものと現実的なものとの、統一という抽象にはかならない。この同一性において精神・観念的なものは、活動的な・創造的な主体として現れる。その主体は自己自身をもっとも単純な行動から無機質な物質や生命をもつ自然を経過して人間に至らしめる客体、自然あるいは現実的なもの、として生成させる。この点を考慮すると絶対的なものは同時にまた(観念的な)世界の関連を表現する。これらのカテゴリーを根拠づけたこの時期のもっとも重要な著作は、「自然哲学の体系の第一の草稿」(1799年)、「先験的観念論の体系」(1800年)、「私の哲学体系の叙述」(1801年)である。

シェリングはこの間に医学、とりわけイギリスの医学者であるジョン・ブラウン(1735-1788)の治療学にも集中的に取り組んでいる。シェリングは医学の学問的な根拠づけによって1802年にランツフト大学から医学の名誉博士号を授与される。イエーナでこの思想家はほぼ3年間にわたってヘーゲルと共同で研究する(1801/03)。ヘーゲルとともに彼は『哲学批評雑誌』(1802/03)を発行し、その雑誌で二人の哲学者は客観的観念論の諸前提を発展させ、そして反省の哲学の諸形式から自己を精神的に区別する。

シェリングのイエーナ時代の著作は内容の積極的な側面をこえて、彼の哲学のもつ合理的な基本方向のなかに非合理的な諸契機をもすでに際だたせ始めている。それはとりわけ絶対者の自然からの分離やこの規定の神へのロマンチックな過度の昇華にあてはまる。1804年の著作『哲学と宗教』においてすでに自然は神から絶対者の崩壊をとおして「地におちた守護霊の混乱した幻影」として現れる。世紀の変わり目とともに始まったイエーナ大学の学問上の後退やそれに個人的な理由も加わってシェリングは哲学教授の椅子を手に入れるために1803年秋にヴェルツブルクへ赴くことになる。ヴェルツブルクで彼はとくに自然哲学や芸術哲学や学問研究の方法論の講義をもつ。これらの講義においてこの思想家は哲学上の活動の頂点から後退していく。1806年にミュンヘンへ彼は向かう。そこで科学アカデミーの会員となりさらに新たに創設された造形芸術アカデミーの事務総長となる。ミュンヘンでシェリングは、エアランゲンでの多年にわたる滞在（1820－1827）を除いて、1841年まで暮らした。ミュンヘンの生活では三つの出来事が際だっている。一つは妻カロリーネの死である。それは彼の思想形成という重要な時期に終りを告げる。数年ののちに（1812年）彼は妻の友達のパウリーネ・ゴッターと結婚し6人の子供をもうける。二つめの出来事は1827年にミュンヘン大学で行ったデカルト以来の新しい哲学の歴史に関する講義——それは彼の学問上の眺望のもとにドイツ古典哲学が形成されるための本質的な点を特徴づける重要な時代の客観的な記述である。三つめの出来事は彼の最後の重要な印刷物『人間の自由の本質に関する哲学上の考察』（1809）の公刊である。その著によって世紀の変わり目とともに始まっていた啓示哲学への彼の移行は完成される。シェリングが1804年以来とりわけ「偉大な沈黙」と言われた1809年以降の時期においてもたえず取り組んだ問題は、絶対的なものと人間をもふくめて有限なもの神からの離反とのアポリアである。このジレンマの解決は「世界時間」のなか

に、すなわち神が自らを二つの偉大な部分において——すなわち一つの部分は人類から出発して、人類が神から最大に離反することであり、他の一つの部分は人類の神への還帰である——啓示するというロマン化された歴史に見出すことができるとシェリングは信じていた。「世界時間」というこの哲学、彼によって何度もくり返し声を大にして叫ばれたがけっして世に受け入れられることのなかったこの晩年の作品、そしてそのなかで主張されていた半ば哲学的な、半ば神知論的な立場が、時のプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルムIV世をしてかってヘーゲルが担当していた講座に招へいさせるために、シェリングを1841年ベルリンへ赴かせる誘因となったのであろう。かくしてシェリングは「ヘーゲル汎神論のドラゴンの種」を根絶することになる。けれども年老いたシェリングにとってベルリンはけっして幸せを約束する地ではなかった。青年ヘーゲル主義の運動、その先頭に若きフリードリヒ・エンゲルスがいた、その運動によって激しく攻撃されたシェリングは彼の講義をやがてまた中止する。彼は孤独のうちにそして哲学の世界からも十数年来忘れ去られたまま1854年8月20日パート・ラーガツ（スイス）で死す。

2. 学問と教育に関する大学の講義

すでに述べたように、シェリングの特別の関心は自然科学に、物理学や化学や生理学とならんでとりわけ医学に向けられる。シェリングは、自然を自我の哲学の対象から完全に排除した彼の先達であるフィヒテとはちがって、人間が中心の位置を占めるところの哲学的な世界像を自然科学の基礎のうえに構築する。哲学とは、と彼は述べるわけであるが、全人間を、そしてその全人間の性質の全側面を把握することにある。そのことから結局のところ全学問が、すなわち人間と自然に関する知の総体が生じるのである。

とはいえほぼ200年の歳月のたった今日、社会の急速な発展とともに学問もまた変化し発展

をとげている。近代の社会理論の形成とともに自然科学も内包的にも外延的にも発展を経験する。とはいえ今日でも大抵の認識はくり返されているのである。シェリングは自然科学と医学に関して現代に至るまで妥当性を保持する理論を構築する。このことはとりわけ個別諸科学を人間の知識全体との関連のなかに位置づけるという彼の試みにあてはまる。シェリングにとっていずれの学者も、哲学者から医学者に至るまで、学の代表者すなわち類の総括者であり、非常に限られた領域ではあるが絶対的なものの認識に、すなわち普遍的な学問的な世界像について共同で研究しているのである。

シェリングは自然科学と哲学との統一を主張し根拠づけた最初の思想家の一人である。いずれの個別科学も、それが力学であれ、物理学や心理学であれ、哲学の世界観上の原理にもとづく全体知識に関連する。そのことは全体に対する部分の関係やあるいは構成要素の総体そのものが全体を形成している有機体に対するその構成要素の関係と同様である。この哲学者がイエーナでは1802年に、ヴェルツブルクでは1803年より行った「学問研究の方法に関する講義」のなかで取り上げた学問の統一というイデーについて今日からみた視点が若干呈示され論評されるべきであろう。

学問研究の方法に関するシェリングの講義の出発点と基礎は自己自身に絶対的な知という概念である。シェリングはこの絶対知を根源知とも名づけており、それは絶対的に観念的なものの形成諸段階に、つまり自己展開する知の個別諸科学へと、認識の樹へと分けられる²⁾。根源知の概念は、語源的にみてもまた発生的にみても、二重の意味を、普遍的なそして特殊な側面をもっている。まず第一にこの概念は絶対的なもの（絶対的に観念的なものと現実的なもの）すなわち宇宙の内的法則、学問一般の基礎を代表する。根源知は、その特殊性から考察するならば、知的な直観すなわちその性質からみて概念的な分析と総合へ至る人間の天性の能力である。真実知は根源知あるいは知ということ

と潜在的にはあるが緊密に結びついている。この真実知あるいは理論認識のための人間の能力は、人間の活動的な側面や行為そのものへの衝動と同様に、時代をこえて人類知として存在する。とはいえそれは人類知が個人から個人へ、世代から世代へとますます陶冶されていく特定の時代においてのみ展開されうるのである³⁾。この内的連関の、すなわち人類知の個人知との交互作用という基礎上で、シェリングは最初の研究者として哲学的な自然観から個別的（具体的）な学問に至るまでの学問の統一を際立たせる。それと同時に世界認識のより低い段階からより高い段階への人類知の歴史的な形成過程を理論的に証明する。

人類知の内容的および歴史的な全体の関係の解明とならんで、シェリングはアカデミーの、大学の学問の習得のための学生の指導にも根本的に力を注ぐのである。彼にとって長きにわたり解決すべき課題として懸案となっていた一番重要なことは、聴講者にアカデミーの真の権威と尊厳の意識を喚起することであった。「学究生活の始まりは」と彼は述べている「若き学徒に鑑みてそれは同時に自立性への第一歩であり、盲目的な信仰というものからの最初の解放である。学生はここではまず学び、練習をし、自己自身で判断すべきである。」⁴⁾ 大学はかくして学生の自立性をも保証しうるし、いかなる外部の影響からも自由でなければならない。とりわけ大学は学問を一定の目的のための手段に貶めようとする国家的なそしていわゆるすべての後見人から免れていなければならない。「学問はそれが単なる手段に貶められて、それと同時に学問それ自体のために促進されないようになるやいなや学問であることをやめるのである。」⁵⁾

上述のことは非常に重要な、直接われわれの時代にも関わりをもつ思想である。今日と同様に当時においても最高の教育機関として大学の自立性と創造性の保持が、そして教育と思想の自由の再生と維持が、そして教授による教養および研究のプログラムの独自の形成が、そして

学長および評議会の自由な選挙が重要であった。

シェリングによれば自由な学究的な陶冶のための本質的な前提は、大学教員に対して個別の専門領域の成果をこえて学問を發生的に、すなわちその概念の展開において叙述するべきであるという要請にある。「学問の全体を学生の眼前であたかもはじめて発生」させるという方法だけが、聴講者に対して学問を所与のものとして甘受するだけではなくそれは創作するものとして自立的に生み出すことを可能とする。⁶⁾ ここでもまたシェリングは発明的であり、近代的な教育方法のパイオニアに属している。問題解決のための独自の熟考と調査（教育学的な教授方法）によって為されたソクラテスのいわゆる認識の産婆術に支えられながら、彼は学生を引き廻してみたり、学生に出来あいの思考の結果を宛がってみたり、形式的に知識を詰込ませるなど、それらのことをすべて拒否する。とはいえ彼はつねにつぎのことを強調していた。習得した知の総計なしには理念の創造的生産も不可能である。学究生活の自由と自立性というイデーには同時に大学では学問以外の何物も妥当しえないし、教養と天賦の才以外の何らの差別も許されるべきではない、という要請が結びついていた。⁷⁾ この関連のなかで哲学者シェリングにとって「学問の世界は、……民主主義ではなく、衆愚政治ではなおさらなく、言葉のもっとも高貴な意味で貴族政治である。学問のうえで最高の人が支配すべきであって」、無能力な者が支配すべきではない。⁸⁾

上述のことは今日でもなお妥当する重要な命題である。もちろんそれは表面的に読むとすればシェリング自身が知的な思い上がりや学問上の傲慢さの光のなかに陥っているかのように思われる。けれども彼の命題の内容を一層くわしく考察するならば、この思想家が最終的にはもっぱら能力のある学生の知的な開発をしっかりと心に留めており、学生が学問をするにあたってその前提となる素質、何ほどかの備えるべき天賦の才の形式をもっぱら要求しているの

である。彼はお喋りやいろんなことに首を突っこんで忙しげに走り廻ることや学問を妨げ、独自の思考や教育を不可能とするようないわゆる特権に対して徹底してそれをやっつけたのである。

3. 医学の学問的な基礎づけ

シェリングは学問研究の自由に関する考察に個別諸科学の論究を結びつける。あらゆる科学を一つの知の有機的な体系のもとに結合させるための、それらの科学の基礎となるべき絶対者の理論としてのあるいは自然および（人間）生活のもっとも普遍的な関連の理論としての哲学とは対照的に、自然に関する具体的な知識は個別の経験や実験や歴史によってもたらされた諸科学によって構成される。それは神学（キリスト教の本体論および歴史論）、歴史学、法学、自然科学（物理学、化学、医学、有機的な自然論をふくめて）、芸術学である。以上の諸科学の全体は自然に関する科学的な全体像の諸部分であり、絶対者一般をはじめて知覚可能とし、認識可能とする専門諸領域である。その理論的な基礎を自然哲学の第一の概念である生命がなしている。自然の運行のなかで生命を単純な始まりからもっとも成熟した形態に至るまで研究することは自然科学の、化学や生理学の対象であり、人間に関しては医学がそうである。あらゆるそれらの科学の課題と方法は生命の法則と必要条件から生まれたものである。

シェリングは生命それ自体を、たえず継続し、したがってくり返し自己に還帰する過程という循環としての、始まりもなければ終りもない、したがってどの過程やどの力が生命の本来の担い手であるのか言及されえない「諸力の自由な遊戯」（F・シラー）としての、特別の生命力という宗教的な原理に厳しく反対して生命それ自体を定義する。「組織と生命は……自己存在するものについて何も表現しないで、もっぱら一定の存在の形式を、交互作用する多くの原因のなかの共通なものを——それは牽引と反発との、収縮と膨張との一般的な矛盾によって特徴

づけられる——表現する。」⁹⁾ 諸力のこの均衡はシェリングにとってはかの普遍的な法則である。すなわちその法則は客観的實在のあらゆる領域で修正をともしながら作用している。たとえば化学的な過程では化学的諸実体の分解と吸引(結合)を規制し、有機的自然では異化と同化によって、あるいは、感受性・興奮性・再生産力によって植物の生命や人間に至るまでの動物の生命を扶養し、そして分析と総合という形式において思考の根本法則を表現する。この根本矛盾があらゆる實在の条件である。この条件が破壊されれば、力の均衡は失われ、事物と現象の實在もまた失われる。かくして有機体はその病気の原因が取り除かれぬとすれば、すなわち有機体の均衡が回復されないとすれば、それは病気となり死に至るのである。

現代の生命概念を輪郭においてすでに先取りしている生命のこの理論にもとづいて¹⁰⁾、シェリングは医学のイデーを病気の原因、予防、治療の理論および実践として展開する。医学を生命のもっとも一般的な法則およびその現象諸形態という科学的な基礎のうえにおくということは、18世紀の末における雄大な試みであった。彼はこの観点から同時代の医学者の見解を解釈している。その場合は彼はとくにイギリスの医師ジョン・ブラウン¹¹⁾の唱える病気の原因論に、すなわち彼が哲学上の創作活動の頂点においてあちらこちらで援用した理論に共鳴する。¹²⁾ シェリングの医療に対する大きな関心にもかかわらず、たとえば、著名なスイスの医師で、哲学者で、詩人であるアルブレヒト・フォン・ハラール(1708-1777)が、すでに以前に無数の動物実験にもとづいて神経の感傷性(感受性)の、あるいは、筋肉の刺激性(興奮性)の理論として仕上げたような、そうした経験と実験によって導かれる理論をシェリングに期待することはできない。たとえ彼が医師の実験的経験を医学の源泉として高く評価したとしても、結局のところ彼にとってかかる経験的に根拠づけられた理論に関心があるのではなくて、病気の原因や治療の可能性を、経験をこえて、有機体の法則

つまり生命ある個人は有限なものであり、限界づけられており、したがって必然的に生理的な変化すなわち病気に支配されるということから説明する理論に関心がある。シェリングはこの認識に導かれて、病気の究極の根拠は感受性・興奮性・再生産力という有機体の生命活動の三つの生理学的な根本形態とそれらの諸変化の、外的な関係のなかにあるのではなくて、内的な関係のなかにあるとみられねばならないと考えた。

以上のことは医者之眼を観察可能な病気の兆候から観察不能な源泉へ、有機体の固有の原因よりもより深いところにある障害へと向けさせた研究である。厳密に言えばあらゆる変化の、肯定的なおよび否定的な変化の基礎はシェリングにとって有機体の二重の関係にある。その一つは自然的な関係であり、生命を構成する諸要因の関係として同時にそれは自然に対してのそして他の事物に対しての関係である。もう一つは神的な関係であり、それは「有機体が宇宙の像であり、絶対者の表現であるところの完全性を示現する。」¹³⁾

「ブラウンは…」とシェリングはこの思考過程をつぎのように明確に表現する。「最初の関係のみを医術にとってもっとも主要な関係とみる。しかしそれだからといって第二の関係を積極的に排除していない。それらの法則(ここでは上述の有機体の根本法則——G. B.)はもっぱら医者に不均衡の〔病気の——訳者〕諸形態の根拠を、不均衡の第一のもっとも主要な患部を教え、薬剤の正しい使用方法を指導し、抽象〔最初の関係の第二の関係からの——訳者〕の不充足さが病気の現象におけると同様に後者の作用における独自の働きを示している、そのことを理解させる。」¹⁴⁾

これらの命題のコンテクストにおいて解剖学への、とくに比較解剖学への——それは医者にとって病気の診断のさいにつねに大いに役立つ——シェリングの高い価値評価もあることが理解される。それは同時に彼が有機的な自然の一般的な建築計画をたてるときも、解剖学的

にみてより単純な生命の諸形態の理解から人体のような複雑な解剖の概念に至るまで認識を深めようとするときもまたそうである。シェリングはこの意味で「医学というものは、……一般に精神の哲学的な陶冶のみならず哲学の原理」——哲学を志向する多くの医学者によってつねにくり返し確認されているテーゼ——をも前提すると述べている。¹⁵⁾

医学に関するシェリングの全体的な把握を代表するであろう彼の『学問研究の方法に関する講義』からの若干のこれらの引用によって、本論文のテーマはつぎの一つの命題にもう一度要約されることになるであろう。近代医学の科学的な基礎づけのために行ったシェリングの貢献は、研修医の注意を病気の外的な現象形態から病気の究極の根拠としての内的な有機的な諸変化に向けさせたということにある。上述のことは自然科学的思考の転換期を意味しており、それは著名な医学者——そのなかにはヨーハン・レッシュラウプ¹⁶⁾がいる——や、あるいは、自然科学者で哲学者のロレンツ・オーケン¹⁷⁾をこえて、19世紀半ばの生理学的研究へと直接に導き、そこで最初の総括が行われることになるのである。

注

- 1) 本論文の本来の内容は医学に関するシェリングの見解について論究するものである。それとともにドイツ古典哲学のこの傑出した代表者の生涯と学問上の業績全体に関する情報が提供される必要がある。この思想家はドイツ古典哲学の他の代表者たちと比較してみても今日まで多かれ少なかれ脇役として取り扱われてきている。ヘーゲルやカントやあるいはフィヒテについて詳しく知っている教養ある読者もシェリングについてはほとんど知らないのであるから、こうしたシェリングの情報は事柄の性質からして重要である。(Dokumente. Bd. II, Zusatzband. Hrsg. H. Fuhrmans. Bonn 1973. S. 409.)
- 2) F. W. J. Schelling: Vorlesungen über die Methode des akademischen Studiums (1803). In: Schellings Werke (Münchner Jubiläumsdruck) Hrsg. M. Schröter. München 1927. 3.Hptbd. S. 237.
- 3) Ebenda, S. 246.
- 4) Ebenda, S. 250.

- 5) Ebenda, S. 251.
- 6) Ebenda, S. 256.
- 7) Ebenda, S. 258.
- 8) Ebenda, S. 259.
- 9) Vgl.: F. W. J. Schelling: Von der Weltseele, eine Hypothese der höheren Physik zur Erklärung des allgemeinen Organismus. Werke. A. a. O. 1. Hptbd. S. 634,617
- 10) 参照。L. フォイエルバッハは1846年に自然科学の最新の成果という立場において、存在のあるいは自然諸力の特別な形態としての生命に関するシェリングの思想との直接的なつながりにおいて、地上の有機生命の生成を酸素—水素—炭素—窒素—化合物の自然的発展によって説明した。(L. Feuerbach: Das Wesen der Religion (1846). In: L. Feuerbach: Gesammelte Werke. Hrsg. W. Schuffenhauer. Berlin 1967 ff. Bd. 10. S. 20.)
F. エンゲルスは30年後に生命を「蛋白質の定在様式」であり、「蛋白質の化学的構成要素のたえず自己更新において本質的に」存在するものであると規定した。(F. Engels: "Anti-Dühring". MEW. Bd. 20. S. 75.)
- 11) ブラウン (1735—1788) はその著 "Elementa medicinae," Edinburgh 1780. のなかで、治療の新たな理論——彼の名にちなんで「ブラウンの刺激理論」と呼ばれる——を開発した。この理論はつぎのことから出発する。あらゆる病気は器官の異常な興奮性に基づくものである。この興奮性は一定の刺激によって上昇させられる(亢進状態)か、あるいは、その緊張状態が失われる(弛緩状態)か、である。ブラウンによればたいていの病気は興奮性の低下によって引き起こされるものであるから、まず考えられることは、興奮性を正常に回復することによって病気を除去するために、弱化した興奮の過程をそれに対応した薬によって引き上げることである。ブラウンの刺激の理論はそれがよく知られるようになってただちにシェリングの自然科学の構成部分となった。医学の歴史ではブラウンの理論は異論のあるものではあるが、20世紀の20年代のドイツで改めて普及し評価を得たのである。(Vgl.: Der GroBe Brockhaus. 20Bde. Bd. 3: Leipzig 1929. S. 386.)
- 12) シェリングは1800年の夏に、彼ののちの妻となるカロリーネ・シュレーゲルの娘アウグステ・ペーマーが赤痢に罹ったとき、ブラウンの方法に基づいて治療を施したが何の効果もあげることができなかった。やがてもたらされた娘の死はこの哲学者の多数の敵対者に公然と彼を批判する絶好のきっかけを与えた。まずイェーナの新聞に、シェリングの理論によってどれほどたやすく哲学博士

の学位を手にすることができることか、——たとえ「ロイベル」という学生が証明したように、——という嘲りの情報が突然登場したのちに、1802年のイエーナの“一般文芸新聞”(225号、1802年8月10日付)につきのような偏ったニュースが現れた。「ロイベルは観念のなかで治療し、現実に殺してしまうというような災難には出くわさなかったが、偉大な哲学者であるシェリングがフランケン(バイエルン)のボクレット村でM. B. [アウグスト・ペーマー——引用者]に施した不幸は、悪意をもつ人々がよく言うように、全くとんでもないことをしでかしたものだ。」(Zitiert nach: F. W. J. Schelling, Briefe und Dokumente. A. a. O. S. 422.) こうした中傷はシェリングの心を深く傷つけたことにちがいない。それは彼がなぜ1803年にイエーナを去って、大学教員としての活動をヴェルツブルクで始めたのかという理由の一つであるといえる。

- 13) F. W. J. Schelling: Vorlesungen über die Methode des akademischen Studiums. A. a. O. S. 362.
- 14) Ebenda.
- 15) Ebenda, S. 362f.

- 16) ヨーハン・レッシュラウブ(1768-1835)はバンベルクの医学教授であり、1802年にランツフートの、1826年にはミュンヘンの医学教授である。彼は本来J. ブラウンの治療学と自然哲学の支持者であり、シェリングを1802年にランツフート大学医学部の名誉博士に推薦する。
- 17) ロレンツ・オーケン、本名はオーケンファース(1779-1851)は理論的に細胞を発見し、ゲーテとは独立に頭蓋骨形成のための椎骨理論を主張する。彼は1809年に学問上の敬意の表現としてその著『自然哲学講義』を「彼の友ステフェンスとシェリング」に献呈する。(Vgl.: L. Oken: Lehrbuch der Naturphilosophie. Bd. 1. Jena 1809.)

〔付記〕

この翻訳は、1992年度阪南大学産業経済研究所助成研究「比較研究によるイギリス古典経済学とドイツ観念論哲学との動態的関連の究明」の成果報告の一部である。

(1993年4月9日受理)